

長島の死

坂口安吾

青空文庫

長島に就て書いてみたところが、忽ち百枚を書いたけれども、重要なことが沢山ぬけているような気がして止してしまった。長島は私の精神史の中では極めて特異な重大な役割を持っているので、私の生きる限りは私の中に亡びることがないのである。従而、今あわただしく長島の全てに就て書き尽すまでもなく、これからの生涯に私の書くところの所々に於て、陰となり流れとなつて書き尽されずには有り得ないのであろう。今は簡単に長島の死に就て書くことにする。

私の知っているだけでも、長島は三度自殺を企てた。その都度、

遺書、或いは死に関する感想風のものを受けとるのは私の役目——全く役目のようなものであったし、同時にその家族に依頼を受けて、死に損った長島と最初の話を交すのも私の役目であった。考えてみると、実に根気よく自殺を企て、根気よく失敗したものだと思う。無論、酔狂や狂言の自殺ではなかつたのである。一度は信濃の山奥の宿で、これは首を吊つたのだが、縄が切れて、血を吐いて気を失つて倒れているのを発見された。次には横須賀の旅籠で、次には自宅で。これは致死量以上の劇薬を嘔みすぎて結局生き返つたのである。このほかにもやっていないとは言えない。一週間ばかりというもの、連日つづけさまに死に就ての已に錯乱した感想を受けとつた記憶が二度ばかりあるが、その結果がどう

なつたことやら私は忘れた。とにかく、毎年春になると一種の狂的な状態になるのである。これは如何ともなしがたい生理的な事柄であるから、仕方がなかつた。

私は彼のように「追いつめられた」男を想像によつてさえ知ることが出来ないように思う。その意味では、あの男の存在は私の想像力を超越した真に稀な現実であつた。尤も何事にそうまで

「追いつめられた」とかという、そういう私にもハッキリとは分らないが、恐らくあの男の関する限りの全ての内部的な外部的な諸關係に於て、その全部に「追いつめられて」いたのだらうと思ふ。たとい恋をかちえても、名声をかちえても、産をなしても、恋を得たことによつて名声を得たことによつて一人あくことなく

追いつめられずには止まないたちの、宿命として何事によらず追いつめられるたちの男であつたのだらうと考えている。彼の死にあい、さて振返つてみると、実に凄惨な男であつたと言わざるを得ない。彼ほど死を怖れた人間も少ないのであろう。彼の自殺といえども所詮は生きたいためであつた。彼もそれを百も承知していたが、彼の生涯を覆うた一種奇怪なポーズは、彼を自殺へ走らせずにはやまなかつた。全く、彼の奇怪なポーズは私の想像能力をも超えているかに思われる。殆んど現実の凡ゆる解釈を飛びこえて、不可解な宿命へまで結びついているとしか考えられない。

丁度このクリスマスの前夜に、また長島の危篤の電報を受けとつた。ところが、十二月の初めに、四五通のやや錯乱した手紙と

ここへ載せてある「エスキス・スタンダール」の原稿とを受けとっていたので、又自殺するのだらうという予感を懐いていた。馴れているので驚きも慌てもする筈はない。さりとしてこの自殺は私の力でどうすることもできないことが分っているので、ほつたらかしておいたのである。寧ろ、これまでの例で言うのと、なまじいに留めだてに類することをしたばかりに却つて死に急がせる結果をまねいたこともあるので、私としては、ほつたらかしておくほかに手段がなかったのである。

電報によつて赴いてみると、今度は自殺ではなかった。脳炎という病氣であつた。脳膜炎どころの話ではなく、膜を通り越して完全に脳そのものをやられているのだという。むろん完全な発狂

である。治つても白痴になるばかりだという。昏睡におちていた。

医者はこの昏睡のまま死ぬであろうと言つていたが、再び眼を覚した。のみならず、眼を覚すこと十二時間の後、再び昏睡におち、今度こそそのまま死が来るだろうと予定されているのに丁度十二時間の昏睡ののち、またまた覚めた。こうして、生きることが已に狂的な不思議な状態が一週間ほどつづいて、一月元旦、正しく言うところ元旦をすぎること五分ののち昏睡のまま永眠した。

この昏睡の間は体温三十六度であるが、覚めたときは四十一度になっている。その体温表は、丁度過ぐる大震災の地震計を見るようなものである。生きながら、その顔は死の相であつたし、視覚も触覚も聴覚も、或る時は殆んど失われていた。腹から下は死

の冷めたさであつた。頻りに苦痛を訴えて見るに忍びない姿であつたが、ことに私は、彼と話を交すために——彼は頻りに私の名を呼ぶので——その口へ耳を寄せる時、殆んど死臭のような堪えがたい悪臭の漂うのには無慙な感をいだかされた。死んでからの顔の方がはるかに安らかであつたのである。ポオの小説に『The facts in the case of Mr. Valdemar』という物語がある。ある男が、

催眠術によつて人間の生命を保ちえないものかと考えて、瀕死の病人に催眠術をかける。丁度死んだと思う頃、呼びさまして話しかけてみると、自分はもう死んでいると病人は言う、そうして断末魔よりも深い苦痛の声をもつて苦しみを訴えるのである。それからの連日二十四時間毎に呼びさまして話しかけると、その表情

その声は一日は一日に凄惨を極め、遂いに術者も見るに堪えがたい思いとなつて術をとくのであるが、とたんに肉体は忽然として消え失せ、世に堪えがたい悪臭を放つところの液体となつて床板の上に縮んでしまふ。——大体、こんな筋の話であつたと記憶しているが、私は長島の危篤の病床で、この物語を思い出していたのである。一つには長島もこの物語を読んでいたからであつて、ある日私にそのことを物語つた記憶が残っていたからであらう。そのことと関係はないが、彼は私への形見にポオの全集とフアブルの『昆虫記』の決定版とを送るようと家族に言い残して死んだ。

彼の病床での囁言は凄惨であつた。一見したところ、とりとめ

のない支離滅裂な叫びに思われるのであるが、結局のところ、彼の宿命的な一生の間、このどたん場へまで追いつめられてきた最後の一行ばかりを断片的に言い綴っているのであるから、彼の精神史の動きを知る私には、正気のそれよりも激しい実感が分つたのである。

私が、君の「エスキス・スタンダール」はいいものであると割に簡単な気分で言ったところが、突然長島は狂暴な眼を輝やかに嘘だ嘘だと絶叫しはじめた。そこで私が、こういう君の最も本質に属するところの仕事に就て人の言葉を相手に嘘だの本当だのと喚いてみても仕様がなからう、それよりも莫迦者の寛大さをもって長閑な道化役者の心をもってきく方がいいと言っ

たところが、彼は急に激しい落胆を表わして、でも俺はそれよりも弱い人間なんだと悄然と呟いた。これは決して気が狂っていないと私は思った。むしろ正気の人間よりも鋭敏である。私の場合で言うと、私は酒に酔ったある瞬間に時々この状態の鋭敏さを持つことがある。狂人の全てがこうではあるまいが、これが狂人なら狂人は恐るべき存在だと私は思った。

狂人のこの驚くべき鋭敏さには彼の父親が気付いていた。なぜなら、長島の父は、いわば長島の一生恐るべきライバルの一人であつて、彼の精神史は常に父を一人の敵として育っていたからだろうと思う。長島の父は高名な陰謀政治家であるが、彼と性格が相似ている上に腹と腹で睨み合つては病弱な長島のとうてい太刀

打の出来難い線の太さと押しの強さがあるように考えられる。恐らく彼は父親に精神的に圧迫され通していたのだろうと思う。彼が危篤の病床で父親に叫んだ言葉は「パパ俺は偉いのだ」という一言であった。ところがパパは一言も答えなかった。そうして、肉体のあらゆる苦悶と格闘しながらもかくように絶叫している子供の顔を一分間ぐらい睨んでいた。それからクルリと振向いてさつさと病室を出た。父は答えなかったにも拘らず、彼は最後まで子供は決して気が狂ってはいないと断言していた。ちなみに、彼の家族は皆彼は発狂したと信じていたのである。そうして、そう考えるのが当然だったのである。

父対長島の場合のように、身を以て絶叫しているにも拘らず返

答がないということ、これは同時に彼対友人、いな、彼対人生の
関係でもあつた。併し人々は故意に彼を苦しめるために返答しな
かつたわけではないだろうと思われる。所詮、この男は、この悲
惨な結果を生まざるを得ない宿命人であつたのだろう。

長島は危篤の病床で私一人を残して家族に退席してもらつてか
ら、私に死んでくれと言つた。私が生きていては死にきれないと
言うのである。そうして死んだらきつと私を呼ぶと言つた。死ぬ
まぎわには幽霊になつて現れるなぞとも言つたのである。そうし
て私に怖ろしくなつたらうと狂氣の眼を輝やかして叫ぶので、私
があたりまえだと言つたら、世にも無慙な落胆を表わしてそれつ
きり沈黙してしまつた。

併し、正直に白状すると、私はそれほど怖くはなかつたのである。彼はその悲惨な宿命として、彼の如何なる激しい意志をもつてしても、到底私を怖がらしたり圧迫したりすることは出来ない因果な性格を持っている。私は無神経なること白昼の蟄の如き冷然たる生物であつて、デリケートな彼はその点に於て最も敵対しがたいのである。それにも拘らず、彼は私のような蟄の意志、蟄の無神経をもつところの人間を相手として友達に選び、それに抵抗しつつも最も親しまざるを得ない悲劇的な性格を与えられていたのであろう。

私は彼の生前によく彼に言い言ひしたのであるが、君は僕に親しむよりも葛巻義敏、本多信、若園清太郎のどれかを選ぶ方がいい

いのだと。その度に、彼はさらに私に激しく反抗するかのような、蒼白な、表情のない顔をして決して一言も答えはしなかった。

断っておくが、長島と私との間には世間的なライバルとか、恋敵とかいう関係は完全になかった。のみならず、そういう世間的な関係はたとい有つたにしても悲劇的な確執を生みがたい奇妙な和合と温かさがあつた。全てはそれよりもより悲惨な性格の中にあつたのである。のみならず、悲劇的という言葉はただ彼にのみ当てはまるのであつて、私自身は事彼に関する限り永遠に帝王の如く完き無神経をもつに止まるという宿命のもとにあつたのである。

彼の宿命的な不幸は、更に彼の病弱の中にもあつた。春の訪れ

る度に狂的な精神状態になるということである。つまり、彼の感受性はとぎすましたように鋭敏なるにも拘らず、逆に表現の能力を阻碍されるといふ悲劇的な一事である。これは生理的に如何ともなしがたい事柄であつたのだろう。

彼は恐ろしく鋭敏な、頭のいい男であつた。ことに語学には天才であつた。私と一緒にラテン語を習いだしたのであるが、私が辞書をひくにも苦勞している頃に、彼は已に原書を相当楽に読みこなしていた。その当時は私も語学には全力を打ち込んでいた頃で、別に怠けてもいなかつたのであるが。

さりとて、彼はデイレツタントと呼ぶべき人間でもない。彼の生活はデイレツタント風の女性的なものではなく、あまりに凄惨

で生ま生ましかつた。併し、ディレツタント式の宿命的な眼高手低は、生理的にどうすることもできなかつたのである。

晩年彼は株に手を出していた。父親の影響で——或いは寧ろ父親にすすめられて、この方面に関係していたらしいが、彼はその方面では立派に玄人の素質があつたし、くろうと以上の或る神秘的な能力さえあつたらしい。そうして、女から女へと盛んに惚れていたそうである。このことは彼の妹さんから最近きかされて吃驚した話であつて、実のところ、私は彼のそういう生活は想像してみたこともなかつた。なぜなら、彼は私等の前では女の話は全くしなかつたからだし、それらしいどんな素振りも見せなかつたからである。彼が私等の前で被っている仮面に就ては最も簡単な

解釈で片づけることも出来そうであるが、私は今そう簡単に片づけることができない気持でいる。彼のポーズは一見自明のように見えて、実は殆んど現実のあらゆる解釈を超越した不可解な彼の宿命に結びついているとしか考えられないのである。そうして、これは彼の宿命であるから今更如何とも仕方のない事柄であつたらうと思うのだが、もしも彼が私等の前で女に惚れた話が平気で言えたなら、彼はまだこの年齢でここまで追いつめられずに済んだのだらうと思われるのである。尤も、このことは最後に鉄の断言をしてもいいが、彼は本気で女に惚れきれぬ男ではなかつたのだ。そうして、時々泣きぬれたりしたが、決して本気で泣ききれたり笑いきれたりする男ではなかつた。常に自分自身に舌を出し

ているところの、も一人の自分を感じつつづけているところの宿命的な孤独人であった。世に最も悲しく、最も切ないところの宿命の孤独人であったのである。彼の死が不幸であるか幸福であるかは、今私にはとても断定はできない。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾選集 第十卷エッセイ」 講談社

1982（昭和57）年8月12日第1刷発行

底本の親本：「墮落論」銀座出版社

1947（昭和22）年6月初版発行

初出：「紀元」

1934（昭和9）年2月号

入力：高田農業高校生産技術科流通経済コース

校正：小林繁雄

2006年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

長島の死

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>